

# 宗教右派としての LDS The LDS Church As a Religious Right 2012 年アメリカ大統領選挙を振り返って A Retrospective View on the 2012 U.S. Presidential Election

平井康大  
HIRAI Yasuhiro

茶会運動に与するグループの一つ、「茶会愛国者」の共同創設者ジェニー・B・マーティンが共和党選出の大統領指名候補、ミット・ロムニーのことを「ワシントンのエリートや、カントリークラブにいるようなエスタブリッシュメントの都合に合わせて選ばれた、ひ弱でどっちつかずの候補」だった、と酷評したというニュースが流れたのは2012年11月7日、大統領選挙の翌日だった[Flock 2012]。宗教右派が多い茶会運動は、今回の選挙においてロムニーを支持していた。それが一夜にして手のひらを返す発言をしたのである。

失業率が7%を越える中で再選される大統領はまれである、などといった事前の観測を乗り越え、現職のオバマ大統領が再選を果たした。この選挙は宗教的背景からしても大変に興味深いものだった。WASP (White Anglo-Saxon Protestant) の退潮傾向が持続する一方で、末日聖徒イエス・キリスト教会 (the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints、通称モルモン教会、以下 LDS 教会<sup>1</sup> と略記) の信者が共和党の大統領指名候補になり、これまでマイノリティの立場に甘んじてきた宗教が表舞台に立った選挙でもあったからである。

末日聖徒 (通称モルモン教徒、以下 LDS<sup>2</sup> と略記) であるロムニーが共和党に指名された事実は、アメリカ社会による LDS 教会への承認を意味しているのかもしれないし、あるいは単にジョージ・W・ブッシュが退場してか

らというものの宗教右派を糾合できるアイコンが現れない、という宗教右派側の内部事情を反映しているだけかもしれない。いずれにせよ、宗教右派やエヴァンジェリカルなどより「信仰心が篤い」と自己規定する白人の8割、白人プロテスタント一般にしても7割はロムニーを支持し、オバマ再選を脅かした。一般投票での得票率はオバマの50%に対してロムニーの48%という大変な接戦だった〔“How the Faithful Voted” 2012〕。

そのロムニーに対する冒頭の発言は何を意味していたのか。本稿では、LDS教会と宗教右派の共闘がいかんにして成立したのかを探り、今後LDS教会が共和党内の社会的保守層の核となっていくのかどうかを検討していきたい。

## 1. WASP フリーの大統領選挙

### (1) WASP の壁

2012年の選挙は非常に興味深い特徴を持っていた。8月29日、ポール・ライアンが共和党副大統領候補の指名受諾演説を行い、これで民主・共和両党の大統領候補、および副大統領候補が決定したが、この4人の中にいわずにWASPが一人もいなかったのだ。2008年の選挙の際には共和党の指名候補だったジョン・マケインとサラ・ペイリンの2人、2004年には民主党の大統領指名候補だったジョン・ケリーを除く3人（ブッシュ、ディック・チェイニー、ジョン・エドワーズ）がWASPであったことを考えると、正副大統領職におけるWASPの存在感の低下傾向がさらにはっきりするだろう。指名候補争いのレースからリタイアしていったほかの共和党候補たちを見ても非WASPが目立つ。ニュート・ギングリッチとリック・サントラムがカソリック、ジョン・ハンツマン前駐中国大使がロムニーと同じLDSである。気が早いことだが、次回2016年の大統領選挙で共和党の有力候補として名前が挙げられているマルコ・ルビオはキューバ系であり、かつカソリックなのでこれまたWASPではない。これまで非WASPといえば民主党の候補ばかりだったが、ついに共和党にも脱WASPの波が訪れたようである。

WASP の厳密な定義は不可能で、特に「アングロ・サクソン」に関しては「自分は純粋にアングロ・サクソン系である」と主張できる人はまれだろう。一般的に父系の血統をたどって「～系」と称することが多いようだが、母系を通じて様々な血統が入り交じっているのが実際である。よって、その容姿や姓名、あるいは話し言葉によほど明確な（それもアメリカでマイノリティ扱いの）民族的特徴が現れていない限り、肌が白い人は「白人でアングロ・サクソン」に数えてもらえると考えてよいだろう。たとえば第 40 代大統領だったロナルド・レーガン（1981-88）の父方の祖先はアイルランド系だが、彼が WASP ではない、という意見はあまり聞いたことがない。ついでながら、レーガンの父親はカソリックだったが、レーガン自身はスコットランド系の母親に従い、プロテスタントとして育てられた。

この広義の WASP の定義をもってしても、現在のオバマ大統領（第 44 代、2009-）が出現する以前に「WASP ではない大統領または副大統領」はジョン・F・ケネディ大統領（第 35 代、1961-63）だけだった。レーガンと同じくアイルランド系だったケネディはカソリックだったからである。1960 年にこのカソリックの大統領が民主党から登場したことを嫌って、南部の、そして宗教的にはかなり厳格なプロテスタントの民主党員がごっそりと共和党に鞍替えした。これが後に「新キリスト教右派」、そして「宗教右派」の核となっていくのだが、それは 10 年以上先の話である。

ことほどさように WASP の壁は大統領候補たちの前に厳然と立ちはだかってきたのだが、2008 年にオバマの出現が再びこの壁に打撃を与えたのは周知の通りである。白人の母をもつオバマを「黒人」とのみ記しては「血の一滴主義 one-drop rule」（「黒人の血が一滴でも混じっていたら、つまり祖先に黒人が一人でもいたら、その人は黒人」という考え方）を思い出させてしまうが、ここはあくまで容姿の問題と考えていただきたい。明らかに白人ではない人がついに大統領になったのである。

そして本題の 2012 年である。民主党の大統領・副大統領候補はそれぞれ現職のオバマとジョー・バイデンが再出馬し、対する共和党からはロムニーとライアンが立候補した。この中にプロテスタントはただ一人、組合派に近

いユナイテッド・チャーチ・オブ・クライストに所属するオバマしかいない。ロムニーは前述のように LDS、そしてふたりの副大統領候補はともにカソリックである。ケネディのおかげであまり目立たなかったが、2008 年にオバマの副大統領となったバイデンは、合衆国史上初のカソリックの副大統領である。

2008 年以前にも非 WASP の大統領や副大統領が民主党から出現する可能性はあった。1984 年の選挙で民主党の副大統領候補だった G. フェラーロはカソリックで、しかも初の女性候補だった。1988 年の選挙で民主党の大統領候補だった M. デュカキスはギリシア正教徒だった。2000 年の選挙で民主党の A. ゴアが副大統領候補に選んだ J. リーバーマンはユダヤ教徒だった。先述の、2004 年に民主党の大統領指名候補だったケリーはカソリックだった。しかしフェラーロを選んだモンデールはレーガンに、デュカキスは父ブッシュに、ゴアとケリーは息子ブッシュに敗れ、非 WASP が当選することはなかった。

ところが今や、共和党が非 WASP の候補をそろえてきたのである。中でも注目されるのは LDS のロムニーだろう。通常の聖書（旧約と新約）に加えて彼ら独自の聖典『モルモン書』を奉じる LDS 教会は、信仰心が篤いと自己規定するキリスト教徒、それもエヴァンジェリカルやファンダメンタリストを自称するようなキリスト教徒からは異端、ないしはカルト扱いされることが多い。こうしたキリスト教徒の立場からすれば、もしもロムニーが大統領に選出されていたなら、非プロテスタントどころか非クリスチャンの大統領が登場していたことになる。

## (2) 茶会に招かれないロムニー

実際、ロムニーは保守的なキリスト教徒や茶会運動からの支持を得ることに苦労している。2010 年の中間選挙で存在感を増した茶会運動がそもそも拡大したきっかけは、2009 年 2 月 19 日、サブプライム住宅ローンで過重な債務を背負った人への救済案をオバマ政権が打ち出したことである。このニュースを報じたレポーターが「シカゴ・ティーパーティをしよう」と放送中に発言したことが予想外の反響を呼んだ。語源になった「ボストン・ティー

「ティー」は1773年12月16日、つまりアメリカ独立前夜に起きた事件である。七年戦争（フレンチ・インド・インディアン戦争）が残した膨大な財政赤字を補填するために、英国政府は英国を経由せずにアメリカに輸入された紅茶に新たな課税をした。これに怒った植民地人が英国経由で入荷された紅茶を船からボストン港に投げ込んだ事件である。GMやAIGなどの巨大企業を救済するために国家予算を次々に注入する政府に対して異議申し立てをする人々には恰好のネーミングであった。

2010年の中間選挙で民主党の議席を大いに脅かした茶会運動の活動や主張は多岐にわたるが、基本は経済的保守主義者<sup>3</sup>、すなわち小さな政府と減税および福祉の削減を求める人々の運動である。そこに宗教右派の社会的保守主義の主張——人工妊娠中絶や同性婚への反対など——が混じるかと思えば、銃規制への反対、移民規制の推進など、オバマと民主党が掲げるリベラルな政策を全面的に否定するような主張が目白押しである。宗教右派に通じたジャーナリスト、D. プロディが上梓した『ザ・ティーヴァンジェリカルズ』によると、茶会運動メンバーの約5割が自らを宗教右派であると考え、約6割は「保守的なキリスト教徒の運動に参加している」と答えている [Brody 2012: 18]。つまり茶会運動において経済的保守主義と社会的保守主義が奇妙な野合を遂げているのである。この問題についてはまたあとで触れることにする。

茶会運動は2012年の大統領選挙に向けてまずマイク・ハッカビー（南部バプティスト）を支持した。そのハッカビーが2011年5月に不出馬表明をすると、次はサントラム（カソリック）の支持に回った。そしてサントラムが選挙からの撤退を表明した2012年春になってやっと、ロムニー支持を表明しはじめたのである。茶会運動以前から小さな政府を主張してきたフリーダムワークス FreedomWorks は茶会運動の興隆に貢献したとされるNPOだが、そのフリーダムワークスがそれまでの「ロムニー阻止」の方針を撤回し、逆に「ロムニーが最有力の候補であることは統計的な事実である」としてロムニー支持を固めたのはサントラム撤退の直前、2012年3月20日のことだった [Weiner 2012]。

ロムニーが掲げた選挙公約だけ見れば、ロムニーと茶会運動、そして宗教右派の主張との親和性は高いし、ロムニー自身もそのことを積極的に訴えていた。共に小さな政府を理想とし、オバマ大統領肝いりの健康保険制度、通称「オバマケア」廃止を唱え、人工妊娠中絶や同性婚に反対し、ヒスパニック系移民を制限しようとしていたからである [Skocpol 2012]。茶会運動の支持層を考慮すると、ロムニー支持への動きが渋かった（その上、選挙で負けたとたんに酷評を始めた）原因の一つは、やはりその信仰にあったのではないかと思われる。ロムニーに立ちはだかっていたのはプロテスタントの壁というより、キリスト教徒の壁だったのかもしれない。

ただ、保守的なキリスト教徒のサークルの外では、ロムニーの信仰はあまり話題になっていない。2012年7月26日にピュー・リサーチ・センターが発表した調査結果によると、7月の時点でロムニーがLDS教会に所属している、と正しく答えた人は6割、その中でロムニーの信仰を不快と感じる人は19%だった。彼の信仰を正しく答えられなかった人は9%いたが、そうした人々の中で不快感があると答えたのはほぼ同率の22%なので、ロムニーの信仰はこの調査に影響を与えていないと言っていいだろう [“Little Voter Discomfort with Romney’s Mormon Religion” 2012]。時代の変化を感じざるを得ない。尤も、ロムニーは2002年のソルト・レーク冬季オリンピックを大会委員長として成功させて以来、マサチューセッツ州知事を4年務めるなど公職にあった時期が長い。上記の調査結果はロムニー個人に対する承認であって、教会全体に対するものではないかも知れない。

さて、順序が逆になったが、次にLDS教会とその教義を概観し、次にロムニーが掲げた選挙公約との関連を見ていきたい。

## 2. LDS 教会の教え

1830年、ニューヨーク州の片田舎でジョゼフ・スミス2世が興した「キリストの教会 the Church of Christ」が現在のLDS教会の原点である。迫害

に追われたこともあり、1847 年以降現在に至るまで、教会の本拠地はユタ州ソルト・レーク市にある。現在では合衆国内在住の LDS は 600 万人弱（対全米人口比で約 2%）、世界全体の信者を合計すると 1,400 万人を超えるという大教団に成長した。少なくとも数の上ではユダヤ教会と同程度の規模を誇るようになったといえる。

かつて社会学者のロドニー・スタークは、第 2 次世界大戦後から 1970 年代末までの信者数の増加率が 10 年あたりで 50% 以上であることに着目し、このペースが続くならば信者数は 2080 年までに 2 億 6,500 万人を超えるだろう（10 年で 30% の場合 6,300 万人）と予測している [Stark 1984]。この 2 億 6,500 万という数字を現在の宗教人口に当てはめて考えるならば、キリスト教

（約 23 億人）、イスラム教（16 億人）、ヒンドゥー教（10 億人）、仏教（7 億人）に次ぐ規模の教会ということになる。21 世紀初めの 10 年では 30% 弱の増加にとどまったようだが、依然として伸長著しい教会であることには間違いない。世界中に 5 万人を超える LDS の宣教師が散らばり、この成長を支えているのである。

### (1) 人種

『モルモン書』によれば、世界中の民はすべてユダヤ民族の末裔である。紀元前 6 世紀、バビロンでの捕囚状態から帰還した古代ユダヤ人たちは、元々あった 12 支族のうち 10 支族を失っていた。この「失われた 10 支族」が世界中に拡散して、各地の人種へと変化したというのだ。よって、LDS 教会の布教活動は、イエス誕生以前にユダヤを離れ、真の福音に触れることができなかった同胞たちを正しい道へと復帰させるための運動なのである。ネイティヴ・アメリカンも同じくユダヤの末裔であると考えた LDS 教会は、

LDS 数の推移<sup>4</sup>

2010	14.1 Million
2000	11 Million
1997	10 Million
1994	9 Million
1991	8 Million
1989	7 Million
1986	6 Million
1982	5 Million
1978	4 Million
1971	3 Million
1963	2 Million
1947	1 Million
1920	1/2 Million
1890s	1/4 Million
1870	110,000
1850	60,000
1840	30,000
1830	6 Members

教会創立初期の段階からネイティブ・アメリカンを積極的に入信させていた。

しかし、「人類皆兄弟」を標榜している LDS 教会において、黒人信者の少なさが目を惹く。合衆国内で黒人 LDS は全信者の 3% ほどにとどまる。世界全体で見ても 5% 程度でしかない [Pond 2009]。合衆国内や西ヨーロッパでは LDS の増加は頭打ちだが、中南米やアジア、中でも南米では 2020 年頃までに人口の 4 割超が LDS に改宗しているという予測があるほど、LDS 教会の布教活動は世界規模で盛んに行われている。しかしこれらの地域とは対照的に、アフリカでは 1990 年代に至ってもほとんど布教の成果が挙がっておらず、2020 年時点でも 5% を越えないだろうと予測されている [Brown et al 1994: 123]。

これは、LDS 教会が 1978 年まで保持していた「黒人政策 the Negro Doctrine」のためであると考えられている。19 世紀に奴隷制度を擁護する論理として、キリスト教徒に広く用いられた聖書の記述に「カインの呪い」、または「ハムの呪い」というものがある。どちらも旧約聖書の「創世記」に現れる話だが、罰を下された人間に、神がなんらかの「しるし」を与えたとされるのが特徴である。奴隷制度を擁護する人々は、この「しるし」が実は黒い肌のことで、よって黒い肌を持つ人々は神に呪われた人の末裔であり、隷従に耐えねばならない、と主張した。LDS 教会の教祖スミスには黒人の友人もいたと伝えられているが、1844 年にスミスが暗殺されてブリガム・ヤングが教会の主導権を握った頃から「黒人政策」が明確に打ち出されるようになり、黒人は LDS 教会に入信することはできても、神権 (priesthood) は与えられないことになってしまった。

LDS にとって神権は神の力に由来するものである。これを授けられた人は、教会の儀式を行なう権威と権能を持ったということの意味する。バプテスマ、聖餐の祝福、神殿結婚など、LDS にとって不可欠な儀式はすべて、神権を所有する男性が執り行わねばならない (現在でも女性には神権は与えられない)。授与の儀式自体、神権を持つふさわしい男性会員の按手によって行なわれなければならないので、教祖ジョゼフ・スミスは天使から直接神権を得たことになっており、これが「真の福音・真の教会復活」の神話の原



点でもある [『教義と聖約』 121: 36]。

神権は教会内での権威と権能に直結するだけでなく、最終的な救済を実現する鍵でもある。LDS 教会に入信することを希望する男女は、まず聖書 (『モルモン書』を含む)、教会の歴史などについて簡単な教育を受ける。その人が 8 歳以上で、自分の行動に責任がとれると判断されたなら、然るべき神権を持った男性によりバプテスマを授けられる。その後 10 年ほどかけてアロン神権 (小神権)、メルキゼデク神権 (大神権) を授けられ、結婚し、そして子どもを作ることが、来たるべき最後の審判の際において最も高い位の天国 (日の光栄の王国) に入るための必要条件である [Gospel Principles: 124-30]。長らく神権を拒否されてきた黒人たちは、すなわち神による救済も拒否されていたわけで、彼らがこの教会に不信を抱くのは当然のことである。2012 年 7 月、NAACP の総会でのロムニーによるオバマケア批判は、単に皆保険制度の享受者としての黒人を怒らせただけでなく、LDS 教会の黒人に対する冷淡な態度を思い出させるものだっただろう [Tomasky 2012]。

## (2) 神人同形同性論

モルモン神学がエヴァンジェリカルなどに受け入れられない理由の一つに、その神人同形同性論がある。通常のキリスト教神学では人間は神や天使と根本的に異なる存在とされ、特にプロテスタンティズムでは原罪を持って生まれてくる人間に自己救済の力がないことが強調される。これに対して、「神はかつて人であり、人もいつかは神になれる」と説くのが神人同形同性論である。

モルモン神学によれば、死者はすべて現世と天国の中間地点すなわち霊界に集められ、キリストの再臨を待つ。この時にこれまで地上に生を享けた全人類が、生前の行いに基づいて裁き (最後の審判) を受けること自体はほぼ通常の解釈と同様である [『ヨハネの黙示録』 20: 12; 『教義と聖約』 76: 111, 128: 6-7]。

救済されることになった LDS の天国は大きく 3 つ、すなわち位の低いものから「星の光栄の王国」、「月の光栄の王国」、「日の光栄の王国」に分かれる。審判の際に、その人が為した行いに応じて振り分けられるのだ。人間

はすべて自由意思を持つとされ、悪を退け、善を選び続けてきた LDS が上位の天国に行ける。どの天国に入れるか、あるいは地獄に落ちるか、はすべて自己責任なのだ。プロテスタントイズムの予定説とは対極にある考え方である。

まず一番罪深いとされるのは、永遠の福音（モルモン教）の存在を知り、それを一旦受け入れたにも関わらず、後になってそれを否定し、サタンに味方した者である。これらの人々は一切の光栄を得ることが許されず、地獄で永遠に苦しむことになる。次に、地上においても、霊界においても福音を受け入れなかった者（LDS による布教活動は霊界でも引き続き行われる）は、「星の光栄の王国」に入れられる [『教義と聖約』 76: 28-35, 44-48, 81-85, 103-106]。

第 3 に、現世においては福音を否定したものの、霊界において受け入れた人は、「月の光栄の王国」に送られる。そして最後に、生前から「イエスの証詞（あかし）を受け入れ、その……御名によりて水中に沈められてバプテスマを受け……戒命（いましめ）を守ることによりあらゆる彼らの罪を洗い潔め……聖霊を受け」た人々は、最高の天界に入ることができる [『教義と聖約』 76: 51-53, 73-79]。これに付け加えるなら、メルキゼデク神権と結婚も「最高の天界」すなわち日の光栄の王国に入るために必要不可欠である。逆に結婚しなかった人は日の光栄の王国に入れないが、そこには男女格差があって、未婚男性は月の光栄の王国までは行けるのに対し、未婚の女性は星の光栄の王国止まりとされている。

この日の光栄の王国は更に 3 つの階級を持つ。パーフェクショニズムを基礎とするモルモン神学では、最高の階級に住める男性は完全無欠な存在、すなわち神になれると教えている。彼らにとって神 = 天父は文字どおり人類の父、生物学上の父であり、人間が自らの努力によって全ての罪から洗い清められ、完全無欠の存在になり、永遠の生命を得ること（昇栄）は、父から子供への最高の祝福である。そして今の神がかつてそうしたように、新たに神々となった男性たちは自分の宇宙を持ち、そこに自分の子どもたちを送り出し、救済への長い旅路を歩ませるのである [『教義と聖約』 14: 7]。また、妻は自分の宇宙に輝く星となるので、妻の数は多いほどよいとされた。かつ

て多妻婚を奨励していたのはこのためである。

自己責任を重んじるモルモン神学ではこのように、自らの救済を選ぶのはあくまでその人本人であって、そこに原罪などが介在する余地がない。アダムの罪はアダムの罪であって、それがほかの人間に及ぶことは認めない（但しその自己責任原則が黒人には適用されなかったのはすでに述べたとおりである）。この極端なまでのパーフェクショニズムは、プロテスタンティズムに忠実であろうとするエヴァンジェリカルなどにはとうてい容認できるものではない。

その一方で、この自己責任論は経済的保守主義を掲げる茶会運動に対して親和性があることもまた事実である。国民皆保険制度は社会的・経済的弱者にとっては重要なセーフティ・ネットだし、GMのような大企業が倒産したら一時的にでも雇用が大幅に減少することは明らかである。しかしそうした制度や企業を維持するために新たな税金を国民に課すことは人々の自由に制限を課すことになる。病気や老後にどう備えるかは個人の決定事項であるし、企業が倒産するのは一種の新陳代謝であって、共に国が容喙すべきことではない。そう考える人々が茶会運動の主たるメンバーであることを考えると、天国の行き先まで自己責任で選べるモルモン神学はいっそう魅力的に映るのではないだろうか。「自分の思考は現実化する」とまで言っているポジティブ・シンキングが広く受け入れられるアメリカ社会のこと、エヴァンジェリカルといえども厳密な予定説を保持しているわけではない。モルモン神学に時代が追いついてきたのだ。

### 3. LDS 教会と共和党

#### (1) 経営者ロムニー

選挙期間中、ロムニーに対してしばしば投げかけられた批判の言葉は「日和見主義者 flip-flopper」だった。彼がマサチューセッツ州知事を務めていた時代（2003-2006）の施策とは正反対の公約を掲げたからである。知事時代と比較して彼が立場を変えたとされる主な政策・方針には人工妊娠中絶（賛成→反対）、同性婚（賛成→反対）、増税（賛成→反対）、移民の市民

権獲得（賛成→反対）、銃規制（賛成→反対）、健康保険制度（賛成→反対）などがある。

ロムニーの伝記、『実像のロムニー』を著したボストン・グローブ紙のクラニッシュとヘルマンによれば、ロムニーを成功へと導いてきたのは常に経営者としての判断であり、彼にとっては何が「売れるか売れないか」が最も重要な価値判断の基準だった [Kranish & Helman 2012]。たとえば、州知事時代にすでに大統領選挙を視野に入れていたロムニーは、彼の名前を後世に残せるような業績を挙げようと考えた。そして彼は仇敵にして民主党の重鎮、テッド・ケネディ（1994年の上院議員選挙においてロムニーはケネディに敗北した）と手を結び、2006年に健康保険制度をマサチューセッツ州で実現させた [Stolberg 2012]。ところが、いざ共和党の指名候補になると、自分が大統領になったら就任1日目にして「オバマケア」を廃止する、と宣言したのは周知の通りである。

自らがマサチューセッツに「ロムニーケア」を実現したこととの整合性が常に問われたが、ロムニーにしてみれば民主党リベラルの牙城ともいべきマサチューセッツで健康保険改革を推進するのはマーケット（票田）獲得のためには当然の選択だったのだろう。それと同時に、大統領候補としてはオバマ・ブランドからロムニー・ブランドを差別化するために、宗教右派や茶会運動の主張を取り入れるのが成功への鍵だったに違いない。「大統領になったら何をするか」ではなくて、「大統領になるにはどうしたらいいか」という点でロムニーは機を見るに敏だったし、一貫性を持っていたとも言える。

## (2) 分裂する共和党

政治的指導者としては信頼しがたいロムニーだが、彼の「日和見」は現在共和党が置かれている状況の反映でもある。おおざっぱに言って共和党支持勢力は3つに分かれている。まず第1に、イラク戦争の際の国防長官D.ラムズフェルドに代表される新保守主義者、通称「ネオコン」である。強大な軍事力を前提に、世界秩序を守るためには単独行動も辞さない人々である。8月28日、ロムニーが共和党の大統領候補に正式に指名された際に出され

た政策綱領には国際問題に対する独自政策の堅持と軍事力の維持が謳われているが、これらはネオコン勢力に対する配慮と思われる [望月 2012]。

第 2 は社会的保守主義を唱える宗教右派である。人工妊娠中絶の禁止、ポルノグラフィの禁止、同性婚の禁止など、宗教的価値観を政治の世界に反映させようとする人々である。G. W. ブッシュ大統領の次席補佐官だったカール・ローヴが宗教右派とのつながりを活用して政権を支えたのは有名で、J. アシクロフトが司法長官に抜擢されたのが宗教右派に配慮した人事の好例である。マサチューセッツ州知事時代のロムニーは人工妊娠中絶や同性婚に対して寛容な態度をとっていたが、大統領候補になってからは方針を 180 度転換したのもこの勢力への配慮だろう<sup>5</sup>。男女間の婚姻や出産に教義上の重要性を見いだしている LDS 教会は、人工妊娠中絶や同性婚に対して反対の態度をとっており、上記のようなロムニーの方針転換は教会の方針にも沿うものである。

そして最後に挙げられるのが経済的保守主義者、すなわち政府は小さく、税金は少なく、社会保障も少なく、環境保護もいらず、ひたすら経済活動の自由度を高めようというグループで、大統領選挙に際してのロムニー自身もここによく当てはまる。このグループを最後に挙げたが、実は 1854 年の結党以来、このグループこそが共和党の本質にして主流である。資本家の利益を代表する彼らは、個人や企業の自由な経済活動を最重要視する一方で、政府による監視や監督の機能を最小限にとどめたいと考えている。そのため、中絶の禁止にせよポルノグラフィの禁止にせよ、宗教的価値観に基づく方針を政策として行う必然性を感じていない。G. W. ブッシュ政権で訟務長官を務めた T. オルソンが、同性婚を禁じたカリフォルニア州の住民投票に違憲訴訟で対抗しようとしているのは「保守的な共和党」という一般的なイメージにそぐわないかも知れないが、これは共和党の経済的保守主義者の側面なのである [Olson 2010]。

一般的に G. W. ブッシュ大統領は宗教右派と親密な関係を保ったと考え

られているが、実際には彼の施策で宗教右派の要求を具体化したものはあまりない。「共和党のキングメーカー」とも呼ばれたジェームズ・ドブソン（フォーカス・オン・ザ・ファミリーの主催者）も政権末期のブッシュに対して失望の念を伝えていたという。G. W. ブッシュもやはり資本家の家系の人間なのだろう [Kirkpatrick 2006]。

2008年の選挙の際に共和党の候補だったマケインは第3グループに属し、宗教右派に対する嫌悪の念をしばしば公式の場で表していたため、そのままでは第2グループからの支持を期待できなかった。そこでマケインが採った懐柔策が、宗教右派に近いペイリンを副大統領候補にすることだったが、彼女の突飛な発言がマケイン陣営をさらに苦しめることになった。第2と第3のグループの間隙を埋めるのは容易ではないようだ。

この分裂をさらに複雑に、鮮明にし始めているのが茶会運動である。すでに述べたように、経済的保守主義と社会的保守主義では主張や目標、そして実行手段に矛盾する点が多い。また、所得の多寡によっては矛盾する目的も掲げている。移民規制を例に挙げると、低賃金労働市場で移民と競合することになる低所得者層は移民規制に賛成するが、資本家は低廉な労働力として移民を歓迎したい。このような齟齬がある限り、茶会運動が共和党を糾合して有力な大統領候補を推挙することはなさそうだが、矛盾を承知でこの運動に賛同する国民も多数いる事実は無視できない。

### (3) 宗教右派としての LDS

それでは最後に、今後も LDS 教会が共和党の核の一つとして機能していけるのか、宗教右派とカソリックの比較研究を参考に検討していきたい。20世紀に入って以降の LDS 教会は全体として共和党の支持基盤である。今回の選挙後の上下院議員を見ても、上院に7人いる LDS のうち5人が共和党員、下院に8人いる LDS のうち7人が共和党员である [Miller 2012]。

「不安定な同盟」という論文で、新キリスト教右派（宗教右派の核となった、社会的保守主義のプロテスタント）とカソリック右派の結束の強さを検討したベンダナらは、「人工妊娠中絶」や「死刑制度」など9つの政策項目

政策項目別比較

	新キリスト教右派	カソリック右派	LDS 教会	ロムニー
人工妊娠中絶	×	×	×	○→×
スクール・ヴァウチャー	○	○	×	○
社会福祉	×	○	△	○→×
女性の地位向上	×	△	×	△
死刑制度	○	×	○	○
核兵器保持	○	×	△	△
天地創造説教育	○	△	△	△
経済的不平等	○	×	○	○
同性愛・同性婚	×	△	×	○→×
銃規制	×	△	×	○→×
移民規制	○	×	△	×→○

参考: Mary E. Bendyna, et al. "Uneasy Alliance: Conservative Catholics and the Christian Right," *Sociology of Religion* 62. 1 (2001): 51-64.

に関して両者の基本的方針を比較した（上の表〈政策項目別比較〉の太字部分）。結論として、両者の結びつきはかなり限定的であり、つまり宗教右派として及ぼせる影響力の範囲もかなり限定されるだろうと述べているが、そこに「LDS 教会」および「ロムニー」個人の方針を追加したのが上の表、〈政策項目別比較〉である。政策項目にも「銃規制」と「移民規制」の2点を追加した。表中、「○」は「賛成」ないしは「容認」、「×」は「反対」、「△」は「どちらとも言えない」を意味する。ロムニーがマサチューセッツ州知事時代から 2012 年にかけて方針変更をした項目については矢印で変遷を示した。

もちろん主張に相違も見られるが、全体として LDS 教会および大統領選挙時のロムニーはカソリック右派以上に新キリスト教右派のパートナーに適していることがうかがえる。すでに LDS 教会が共和党への協力を積極的である以上、今後の共闘の鍵は新キリスト教右派が LDS 教会をどこまで受け入れられるかにかかってくるだろう。2012 年の大統領選挙に関していえば、ロムニーはカソリック右派のライアンをパートナーにすることで宗教右派内

部の結束を高め、宗教右派からの支持をより確実にしたが、その反動として左派はおろか、中道の支持もかなり失ったと考えられる。ロムニーとライアンでは、宗教右派同士の組み合わせにしか見えなかったからである。ロムニーが宗教右派の代表として受け入れられていれば、副大統領候補の選択の余地が広がり、選挙の結果もまた異なっていたかもしれない。

#### 4. まとめ

LDS 教会が部外者、特に宗教右派から信頼を得にくい原因として、その独自の聖典と極端なパーフェクショニズムに触れた。それらに加えて、かつてこの教会は多妻婚を奨励した歴史を持っている。前述のように結婚は救済の根幹に関わることだったため、教会は連邦軍と戦争をしてまでこの制度を守ろうとした（1857-58年）。しかし南北戦争終結後の急速な西部開発がユタ準州およびその周辺地域における LDS 教会の支配を動揺させ、ついに 1890 年、大管長 W. ウッドラフが多妻婚を停止する声明を出した。ここにおいて LDS のほとんどが新規の多妻婚を行わなくなったが、それから 100 年以上経った現在でも「モルモン原理主義者」を自称して多妻婚を実行する人たちがいる。こうしたモルモン原理主義者はしばしば幼児虐待や重婚の罪に問われてゴシップとなっており、近年ではウォレン・ジェフスのケースが記憶に新しい [“Notorious Polygamist to Get New Trial”]。LDS 教会は彼らが「モルモン」や「原理主義者」を名乗ることすら認めていないが、そうした事件が LDS 教会全体のイメージを損ねているのは想像に難くない [Hinckley 1998: 70]。

しかし多妻婚を放棄した後の LDS 教会は、一転して一夫一妻制の伝統的な家族を重視してきた。ビジネスの世界と親和性が高い一方で、死刑制度に賛同すること、自助努力を重んじることなどで宗教右派のグループとも主張が重なり合う。2012 年の選挙で茶会運動メンバーがロムニーを承認しながらなかったことは前述の通りだが、すでに 2008 年の選挙に際して宗教右派の著名人がロムニーを推すことを言明していたのである。経済的保守主義者のマケインが宗教右派と犬猿の仲であることはすでに述べたが、マケ



インが共和党の指名候補として優勢になっていた同年2月、前出のドブソンや、右派的発言で有名なラジオ・ショーのホスト、ラッシュ・リンボーはロムニー支持を掲げていた [Rubin 2008]。また、宗教右派ではないが、D. アイゼンハワーや R. ニクソンなど、歴代大統領との親交で有名な牧師、ビリー・グラームが2012年10月にロムニーと面談したことも話題になった。その面談の直後にグラームが設立したビリー・グラーム福音協会のウェブサイトから、「モルモン教はカルトである」との記述が削除されたからである [Marrapodi 2012]。グラームは、かつてケネディが大統領選挙に出馬した際には反「カソリック大統領」の論陣を張った人でもあるが、この国民的に著名な牧師が LDS 教会を承認したことは、今後この教会に対する一般的な評価に大きな影響を与えるだろう。

大統領候補としてのロムニーはマサチューセッツ州知事時代の自らの業績を否定するような政策転換を行ったために信頼を失った。これは一貫性 (integrity) を重視するアメリカ社会の中では当然の帰結と言えるだろう。しかし LDS 教会全体を見渡すと、宗教右派と連携する機が熟しているように見える。アメリカ合衆国の人口に占める割合がそれぞれ15%を越えるといわれる黒人やヒスパニック／ラティーノに比較すると微々たる存在だが、求心力を失いつつある宗教右派の中で一定の存在感を示していくことになるのは間違いないだろう。

あるいは今回の選挙におけるロムニーの健闘は、アメリカ合衆国における宗教風土の変動の反映かもしれない。前出の『実像のロムニー』に次のようなエピソードがある。2002年のマサチューセッツ州知事選挙で勝利を収めたとき、選挙期間を通じてロムニーの信仰が政治的な 이슈にならなかったことをロムニーが喜んだという [Kranish & Helman 2012: 235]。いわゆる先進国の中でアメリカはきわめて宗教的な国として知られてきた。しかし宗教右派の運動を牽引してきたリーダーたちは高齢化し<sup>6</sup>、18歳以上の人口の16% (18 - 29歳に限定するなら25%) が今や「無宗教」を名乗るようになった [Merica 2012; “U.S. Religious Landscape Survey”]。アメリカの有権者は次第に宗教による候補者の選別から解放されつつあるのだろう。

## 註

- <sup>1</sup> 末日聖徒イエス・キリスト教会の信者を指して“a Mormon”と呼ぶのは元来侮蔑的行為だった。この問題を避けるため、近年の研究書では当該教会を“the LDS Church”、個々の信者を“an LDS”、教義の体系は“Mormonism”とすることが多い。本稿ではそれに沿う形で教会を「LDS 教会」、信者を「LDS」、教義を「モルモン教」と表記する。
- <sup>2</sup> 註 1 を参照。
- <sup>3</sup> 日本やヨーロッパと異なり、封建制度や貴族制度がなかったアメリカでは自由な経済活動を支持することが原点であり、リベラルでいることが保守なのである。よって、上記のような小さな政府を求める人々は自らがリベラルであると称し、修正資本主義的な政策を掲げるオバマのことを社会主義者だと批判するのが通例である。しかしそれでは日欧での言葉の使い方と食い違っており、本稿では政府の機能や権限を最小化しようとする考え方を経済的保守主義と表記する。
- <sup>4</sup> 1830 年から 1978 年までは [Stark 1984] 参照。1982 年以降については LDS 教会発行の雑誌 *Ensign* や国勢調査を参照した。
- <sup>5</sup> 同性婚に関してロムニーは知事時代から方針転換をしていないとも言える。通常の夫婦が享受する権利をすべて同性婚者にも認めるシヴィル・ユニオン civil union は支持したものの、同性「婚」 same-sex “marriage” という言葉は慎重に避けていた [Kranish & Helman 2012: 231]。
- <sup>6</sup> 1980 年代に「宗教右派」を世間に認知させた J. フォルウェル (1933-2007)、P. ウェイリッチ (1942-)、R. ヴィゲリー (1933-)、1990 年代に活躍した P. ロバートソン (1930-)、2000 年代の「キング・メーカー」ドブソン (1936-) など。

## 参考文献

- Bendyna, Mary E., et al. “Uneasy Alliance: Conservative Catholics and the Christian Right,” *Sociology of Religion* 62. 1 (2001): 51-64.
- Brody, David. *The Teavangelicals: The Inside Story of How the Evangelicals and the Tea Party Are Taking Back America*. Grand Rapids, Mich.: Zondervan, 2012.
- Brown, S. Kent, Donald Q. Cannon, Richard H. Jackson, eds. *Historical Atlas of Mormonism*. New York: Simon & Schuster, 1994.
- Doctrine And Covenants of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*. Salt Lake City, Utah: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 1982. 『教義と聖約』佐藤龍猪訳, 末日聖徒イエス・キリスト教会, 1957 年.
- Flock, Elizabeth. “Tea Party Slams Mitt Romney as ‘Weak Moderate Candidate’ Hand-Picked by ‘Mushy-Middle’ GOP.” *U.S. News*. November 7, 2012.

- < <http://www.usnews.com/news/blogs/washington-whispers/2012/11/07/tea-party-slams-mitt-romney-as-weak-moderate-candidate-hand-picked-by-mushy-middle-gop> >
- Gospel Principles. (Salt Lake City, Utah: The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, n.d.): 124-30.
- Hinckley, Gordon B. "What Are People Asking about Us?" *Ensign*, November 1998.  
< <http://www.lds.org/ensign/1998/11/what-are-people-asking-about-us?lang=eng> >
- "How the Faithful Voted: 2012 Preliminary Analysis." *The Pew Forum on Religion & Public Life*, November 7, 2012.  
< <http://www.pewforum.org/Politics-and-Elections/How-the-Faithful-Voted-2012-Preliminary-Exit-Poll-Analysis.aspx> >
- Kirkpatrick, David D. "Conservative Christians Criticize Republicans." *New York Times*, May 15, 2006.  
< [http://www.nytimes.com/2006/05/15/washington/15dobson.html?pagewanted=all&\\_r=0](http://www.nytimes.com/2006/05/15/washington/15dobson.html?pagewanted=all&_r=0) >
- Kranish, Michael, and Scott Helman. *The Real Romney*. New York: HarperCollins, 2012.
- "Little Voter Discomfort with Romney's Mormon Religion." *The Pew Forum on Religion & Public Life*, July 26, 2012.  
< <http://www.pewforum.org/politics-and-elections/2012-romney-mormonism-obamas-religion.aspx> >
- Marrapodi, Eric. "Billy Graham Site Removes Mormon 'Cult' Reference After Romney Meeting." *CNN Belief Blog*, October 16, 2012.  
< <http://religion.blogs.cnn.com/2012/10/16/billy-grahams-group-removes-mormon-cult-reference-from-website-after-romney-meeting/> >
- Merica, Dan. "Survey: One in Five Americans Has No Religion." *CNN Belief Blog*, October 9, 2012.  
< <http://religion.blogs.cnn.com/2012/10/09/survey-one-in-five-americans-is-religiously-unaffiliated/> >
- Miller, Tracy. "Faith on the Hill: The Religious Composition of the 113th Congress." *The Pew Forum on Religion & Public Life*, November 16, 2012.  
< <http://www.pewforum.org/government/faith-on-the-hill--the-religious-composition-of-the-113th-congress.aspx> >
- 望月洋嗣「ロムニー氏 強い米へ回帰——2012 米国大統領選」『朝日新聞』2012 年 8 月 30 日
- "Notorious Polygamist to Get New Trial." *Catholic Online*, July 27, 2010.  
< [http://www.catholic.org/national/national\\_story.php?id=37569](http://www.catholic.org/national/national_story.php?id=37569) >
- Olson, Theodore B. "The Conservative Case for Gay Marriage." *Newsweek* 155. 3 (January 18, 2010): pp. 40-42.
- Pond, Allison. "A Portrait of Mormons in the U.S." *The Pew Forum on Religion & Public Life*, July 24, 2009.  
< <http://pewforum.org/Christian/Mormon/A-Portrait-of-Mormons-in-the-US.aspx> >
- Rubin, Jennifer. "Voters Reject Romney ... and Limbaugh and Coulter and Dobson." *New York Observer*, February 6, 2008.  
< <http://observer.com/2008/02/voters-reject-romney-and-limbaugh-and-coulter-and-dobson/> >
- Skocpol, Theda. "Mitt Romney, the Stealth Tea Party Candidate." *Washington Post*, February 3, 2012.  
< [http://articles.washingtonpost.com/2012-02-03/opinions/35444098\\_1\\_tea-party-illegal-immigrants-mitt-romney](http://articles.washingtonpost.com/2012-02-03/opinions/35444098_1_tea-party-illegal-immigrants-mitt-romney) >

Stark, Rodney. "The Rise of a New World Faith." *Review of Religious Research* 26. 1 (September 1984): pp. 18-27.

Stolberg, Sheryl Gay. "Kennedy Helped Shape Romney's Career, and Still Haunts It." *New York Times*, March 24, 2012.

< <http://www.nytimes.com/2012/03/25/us/politics/ted-kennedy-helped-shape-mitt-romneys-career-and-still-haunts-it.html?pagewanted=all> >

Tomasky, Michael. "A Mouse in the White House?" *Newsweek* 160. 6 (August 6, 2012): pp. 24-28.

"U.S. Religious Landscape Survey." *The Pew Forum on Religion & Public Life*.

< <http://religions.pewforum.org/reports> >

Weiner, Rachel. "Freedomworks Accepts Mitt Romney." *Washington Post*. March 21, 2012.

< [http://www.washingtonpost.com/blogs/the-fix/post/freedomworks-accepts-mitt-romney/2012/03/21/gIQACQuYRS\\_blog.html](http://www.washingtonpost.com/blogs/the-fix/post/freedomworks-accepts-mitt-romney/2012/03/21/gIQACQuYRS_blog.html) >